

平成30年2月10日号 (第182回)

阿伎留通信

公立阿伎留医療センターは、医の心を重んじ、患者の生命と健康と生活の質を考える良質の医療を実践し、地域医療の最適化に努力します。

冬本番の寒さが続いています。インフルエンザの流行もピークを迎えていますので、うがいなどによる予防を心がけましょう。



今回の阿伎留通信は、 — 「脳卒中の話」 —

をテーマに脳神経外科の平岩 直也 医師よりお話しさせていただきます。

脳卒中というのは、その字の通り「卒（にわか）に中（あたる）」という意味で、突然に起こってしまう脳の病気を差します。脳卒中は日本人の死因の第3位で、年間10万人あたり180人が発病してしまいます。脳卒中は大きく3つの種類に分類され、頭の血管がつまってしまう「脳梗塞」、脳の中に出血してしまう「脳内出血」、主に動脈瘤破裂による「くも膜下出血」があります。脳卒中の症状は様々で、突然の半身脱力、感覚異常（しびれ）、呂律不良、めまい、目の見えにくさなどが主ですが、時に認知症のような症状が起こることもあります。さらに重症の場合は意識障害、激しい頭痛、嘔吐などで発症することもあります。

①脳梗塞： 脳卒中の約7割以上を占めるもので、脳の血管がつまってしまい、脳への血流が滞ることで生じます。脳梗塞の原因は様々で、心臓病や不整脈、頸動脈の動脈硬化、脳動脈の動脈硬化や血管の壁がはがれてしまう動脈解離などがあります。脳梗塞になった脳は元に戻らないので、麻痺やしびれなどの症状が残ってしまいます。ほとんどが内科的治療を行います。脳梗塞の範囲が広い場合は開頭減圧術が必要になります。また原因によっては頸動脈の手術やバイパスの手術を行うこともあります。

②脳内出血： 脳内出血は脳卒中の約2割を占め、脳梗塞と同様原因は様々です。高血圧が原因となることが多いですが、脳血管奇形や脳腫瘍、高齢になると多いアミロイドアンギオパチーという病気が原因となることもあります。脳内出血は脳梗塞と同様に脳の破壊性病変ですが、頭蓋内という閉鎖空間に突然大きな血の塊が生ずるために、頭の圧が上がり、正常な脳を二次的に破壊してしまうこともあります。そのために出血量が多い場合は緊急で手術が必要になることもあります。

③くも膜下出血： 脳卒中の残りの1割弱を占めるもので、一番怖い脳卒中です。原因の多くは脳動脈にできたコブが破裂してしまう動脈瘤破裂ですが、一部は動脈の壁がはがれてしまう動脈解離でも起こります。くも膜下出血のキーワードは、「突然ハンマーで殴られたような、今まで経験したことのない激しい頭痛」で、多くはその後の意識障害と嘔吐で救急搬送されてきます。くも膜下出血の治療は手術しかありません。手術の方法は大きく二通りで、クリッピング術（開頭術）とコイル塞栓術（血管内手術）があります。くも膜下出血になってしまうと、実に1/3の方が亡くなられ、もう1/3の方は重い後遺症を患い、残りの1/3の方が何とか社会復帰できるという転帰をたどります。



脳は再生しない臓器のため、脳卒中により壊れた脳は元に戻りません。従って、脳卒中の治療というのは、「破壊された脳を元に戻す」あるいは「麻痺などの症状をよくする」というものではなくて、あくまでも再発の予防なのです。脳卒中を患った方の中には、幸い症状が軽症で済み、ほとんど後遺症を残さずに自宅に帰る方もいらっしゃいます。しかし、それは脳が治ったのではなく、残った脳がその機能を代償してくれるからに過ぎません。どんなに回復したと思っても、脳の疾患は100%の回復はありません。そのため、脳卒中は1度目より2度目、2度目より3度目と、繰り返すほど症状は重くなっていきます。脳卒中になるのはあつという間ですが、脳卒中の怖い所は、病院に到着して「ああよかった」ではなく、そこからが病気との闘いになります。脳卒中になってしまうと、自宅へ帰れずに施設退院や他病院へ転院ということもあります。もし自分やご家族に脳卒中を疑った場合は、迷わずに医療機関を受診してください。脳梗塞であれば早ければ投与できる薬もありますし、早期の治療開始によって病変の拡大を防ぐこともできるからです。

脳卒中は生活習慣が大きくかかわってくる病気です。脳卒中の危険因子として、高血圧、高脂血症、糖尿病、心房細動などの疾患や、喫煙、運動不足、肥満、アルコール過飲などの生活習慣が挙げられます。脳卒中にならないために、定期的に生活習慣を見直すことが重要です。また水分の補給も重要です。心不全を患っていたり、透析を行っている方以外は、一日に1.5リットルの飲水を勧めています。脱水により脳梗塞になりやすいのはもちろん、頭痛の原因にもなるからです。

また、くも膜下出血の原因となる動脈瘤は、破裂する前であれば比較的安全に手術が可能です。動脈瘤はMRIで発見できますし、大きな脳梗塞になる前の「隠れ脳梗塞」も発見できます。脳動脈瘤と診断された方が血縁関係にいらっしゃる方、または脳卒中が心配な方は、是非脳ドックの受診をお勧めします。

阿伎留通信については、第1回から最新号まで、公立阿伎留医療センターのホームページで御覧になることができます。ホームページアドレス(<http://www.akiru-med.jp>)